

温もりのある自然な言葉を届ける人

大野悠詩集『小鳥の夢』に寄せて

鈴木比佐雄

1

大野悠さんの詩の魅力は、徹底した自然体であり続けながら、この世に存在する最も大切な何かを探りだして、読み手の心にかつての間にか届けてしまうことだろう。大野さんは一九二九年に大分市に生まれ、中学校の教員を勤め上げて、今も大分市に暮らしている。英語教師だったので英米系の詩を読むことへの関心は、若い頃からあったそうだが、日本語の詩作を本格的に書き始めたのは、定年退職後だった。そんな詩作をまとめたのが、二〇一〇年十月二十三日の八十一歳の誕生日に刊行された第一詩集『ほほえみ』（五十篇）だった。その詩集を私が初めて読んだ時に、心の奥底には

圧倒的な温もりが広がっていくように感じた。読み手の心に温もりのある言葉を届けるように大野さんの詩集は組み立てられていると思われた。きつと大野悠さんにとつての詩作とは、心の温もりに向かつて紡がれているのではないかと想像された。詩人に詩を促すものが何かを考えてみる時に、大野さんの詩作態度は、とても清々しく感じられてきた。母の最期の言葉を記した「記憶」という詩を引用してみる。

記憶

息をひきとる前日 枕元で手をつく
と高熱で 意識を失っていた母が
そのときだけはつきりと意識を取り戻し
「立派になったなあ」と手を差し伸べて
学生服の金ボタンをまさぐりながら

しみじみと温かい眼差しをした

昨日のぼくとも おとといのぼくとも

別に変わらぬ いつもぼくに

彼女はそう言ったのだ

死のまぎわに

熱に疲れた目で彼女はぼくに

どんな姿をみていたのか

それは 息子の未来を夢見る母が

自らえがいたまぼろしではなかったか

ぼくの心が 何十年も

そのときの記憶をとどめてさまよっているよ

うに

母も自らの目に焼き付けた記憶を持って

果てしない旅を続けているのでは

やがて この青空のどこかで 浮遊する
母の記憶とぼくの記憶の出会いのときが
あるのかもしれない
はつなつの 絶え間無くゆきかう しろい
雲の動きに いつまでも耳を澄ましている

母の臨終を描いた劇的な場面の詩なのだが、別離の深刻さを超えて、母が子に伝える深い愛情が「立派になったなあ」という言葉によって際立ってくる。そのように読み手に自然に最も大切な何かを訴えかけてくる大野さんの詩の特長がよく描かれている。大野さんは人がさりげなく言う言葉の中に、深い意味を読み取っていて、それを詩の中心テーマに据えている。それゆえに自然体の中に、実は劇的で詩的な仮構空間が形作られているのだろう。また母の言葉を大野さんが何十年も想

起することによって、母からいつも「立派になつたなあ」と言われるように生きなければならぬと考へてきたのだろう。「息子の未来を夢見る母が／自らえがいたまぼろしではなかったか」と失望させないために生きようとしてきたのだろう。大野さんの詩の言葉は、他者の肉声に込められた愛情や幸せを願う思いや切実な生の叫びを掬い取って、自らの内面の深いところで対話を成立させている。その対話は静かで強靱な響きを感じさせてくれるのだ。

次に詩「ふたり」を読んでみたい。

ふたり

「見たくない。チャンネルをかえて……」
と妻は目をそむける

(この時間帯はどこも同じなのに)

わたしは目を離さないで見つづける

荒れ果てて空までかわいたアフガン

爆弾が大地を飛沫の如く噴き上げる

砂塵のなかに生まれ さまよう

無数の難民の埃にまみれた顔、顔、顔……

抱かれた子供のあどけない瞳の底に

降り積もってゆくものは何だろうか

妻もわたしも かつて戦争の重圧の下で

それぞれの青春を傷つけ葬ってきた

あれから五十六年 長い時間に洗われて

癒されたはずのたましいが

今この映像を前にすると張り裂けて

あかい血を噴いて慟哭する

宇宙でただ一つ 生命を育んでいるという

この優しい小さな星の

一瞬にして崩れ去る平和の脆さよ

一人は心が痛むから見ないといい

一人は心を痛めながら見つづける

はるばると傷を抱いて来たふたりが

難民たちといっしょにさまよっている

大野さんは戦争末期には十五、六歳だったので、勤労学徒動員にも駆り出されて様々な戦争の悲劇に遭遇したのだろう。大分市は海軍基地があったこともあり、延べ二十二回にも及んだ大分空襲があり、その中には鶴崎空襲もあった。また近県の八幡空襲や福岡大空襲にも多くの関係者がいたかも知れない。大野さんは直接的にはその経験を語らないが、それらを踏まえているからこの「ふたり」という詩が生まれたのだと思われる。「ふた

り」という詩の魅力は、たとえば夫婦であっても感じ方は全く異なる反応を示すものだが、その感受性の違いの根本にある戦争の悲劇の痛みを明らかにしていることだ。今も続いているミサイル攻撃や空襲空爆にさらされるアフガンの難民たちへ、寄り添うような思いが最終連の四行を刻ませたのだ。「二人は、心が痛むから見ないといい／一人は心を痛めながら見つづける／はるばると傷を抱いて来たふたりが／難民たちといっしょにさまよっている」という四行は、大野さんの正直な思いなのだが、戦争の悲劇を語り継いでいく日本人が決して手放してはならない平和思想の根幹に関わるものだと私は再認識させられた。その意味でも「ふたり」は大野さんの代表作になる詩篇だと私は高く評価している。

第二詩集になる新詩集『小鳥の夢』は、四章五十二篇から成っている。第一詩集刊行から一年数ヶ月で五十篇以上の詩篇が誕生したことになる。大野さんは八十歳を過ぎた今が最も多産な詩作の時期となったのだ。大野さんの言葉は、より自由により率直により温もりのある言葉になってきている。いやむしろ大野さんの発語するものは、詩としか言えない言葉に自然となってきたのではないか。そんな思いに捉われてくる詩篇群なのだ。一章の冒頭の詩「小鳥の夢」を引用してみる。

小鳥の夢

新しい朝の
凍えた霜の芯から
熱く立ち上がるものがある

寒風にこぼれ散る
サザンカの花
その葉陰には幾つもの
可愛い蕾のまなざしが
赤く燃えている……
夜は一線のむこうに消え
はつきりと朝が来た
はるかな海の彼方
太陽にせかされて
けさも 金色の竜が
光芒をきらめかせながら駆け上がり
あでやかに乱れ
やがて静かに姿を消す
空は春を呼ぶ水の色

時間があふれ
光があふれ
ふくらむ ふくらむ
小鳥の夢

両手をしっかりと繋いで
波が歓声を響かせながら
磯辺に向かつて
激しく駆けよってくる

「ぼく」はその砕け散る
真つ白な飛沫しぶきの中から
広い空へと飛び立つのだ

大野さんは、早朝に大野川流域を散歩されているという。特に第二詩集の詩作時期は、長年連れ

添った妻が入院し一人暮らしだったそうだ。新詩集の詩には、大野さんの散歩しながら見る風景に触発されてくる生き生きした歩行のリズムが乗り移っている。その身体の芯から暖まって来る言葉が「温もりのある言葉」に転換されてくるのだろう。「新しい朝の／凍えた霜の芯から／熱く立ち上がるものがある」とは、大野さんが戦前の大野川流域と海辺で戯れていた少年時代の感受性が身体内部から甦ってきたに違いない。大野さんの自宅の最寄の駅は鶴崎だが、この別府湾の東側に位置する鶴崎は、幕末の勝海舟や坂本竜馬が長崎に向かう際に立ち寄った中継地点であり、当時は毛利空桑という儒学者で尊王攘夷論者がいて吉田松陰とも親交があり、また勝海舟や全国の尊王攘夷の志士たちが鶴崎に来訪した時には、交流を持ち影響を与えたとも言われている。最盛期には門人が千名もいたという。風光明媚な鶴崎の海岸は

昭和三十年代に埋め立てられて現在は臨海工業地帯に変わっている。大野さんのこの「小鳥の夢」に出てくる磯辺の光景は、きつと砂浜や磯が広がる自然な鶴崎の海岸であったのだろう。「時間があふれ／光があふれ／ふくらむ ふくらむ／小鳥の夢」という詩行は、磯辺に戯れていた少年・青年の頃の
大野さんの感受性そのものなのだろう。大野さんの精神は世界に開かれていて、後に英語の教師になって多くの子供たちを励まして彼らの夢を育てていこうと誓ったに違いない。「小鳥の夢」とは、少年・青年時代の
大野さんの夢でありながら、大野さんが関わった教師時代の子供たちの夢でもあったろう。大野さんは早朝に大野川流域からかつての鶴崎の海岸を臨み、「小鳥の夢」を反復して生きておられるのだと思われた。

一章十六篇のその他の詩篇は春から始まり冬までの四季折々の詩篇群だ。詩「神の息づかい」

は、「朝な朝な／あたらしい」経験を伝えている。詩「仏の里」では、「慈愛の思いみなぎらせ」る「仏の里」へと「足が自然に私をここに運んでくるといふ」。詩「啓蟄の呼び声」では、大野さんを「虫が一匹」呼んでいる暖かい日を記している。詩「蜜を吸う鶯」では、少年時代に椿の花の蜜を吸ったことを想起して、蜜を吸う鶯と少年時代の飢えを重ねている。詩「紫陽花と五錢玉」では、「八幡様の祭りの人込みの中で」五錢玉を握らせてくれた「美しい女人」の妖しい魅力を伝えている。詩「夏のほととぎす」では、春と夏のほととぎすの鳴き声の違いをユーモラスに語っている。詩「柿をありがとう」では、柿を贈ってくれた人への感謝と同時に、秋という季節を知らせてくれた柿そのものへの感謝を伝えている。詩「紅葉のように」では、「わたしも／人生の終わりには／せめて／美しき紅葉でありたい」という大野さんや海辺を愛する人たちが大切な人の思い出を生きている人びとに愛読して欲しいと願っている。

山に向かって

僕はまた

出発点に立っている

寒々とした冬のたそがれだ

僕はまた

山に向かって立っている

荒涼とした

見知らぬ土地だ

僕にとつてこの世とは

ほそぼそと続く闇の回廊

際限のない楕円運動

の生きる美意識を語っている。冬の詩篇の中には、詩「鴨の温もり」がある。この詩は工場廃水によって大野川流域が水鳥たちの「生命を傷める場所となるのでは……」と警告している。大野さんの言葉は、「鴨の温もり」をこの世の「命の温もり」として伝えようとしているのだ。

二章の十四篇は、妻、父母、兄、祖母、叔母、孫との自然な触れ合いの中で、感じた最も大切な思い出を感動的に語っている。三章の十一篇は、戦争中の悲劇を記した詩篇や旧友や詩人との永久の別れを描いた痛烈な詩篇群だ。四章の十一篇は、大野さんの今を生きる暮らしや生活心情や動植物を見つめる視線が描かれている。最後に置かれた詩「山に向かって」を引用したい。この詩は大野さんという詩人の宿命を語っていると同時に、多くの人間の宿命をも伝えてくれている。大分県の大野川を愛する人だけでなく、多くの場所の山河

山に向かって立っている

夢中でさまよって
気がつけばまた
出発点に戻っている
足跡さえも残っていない

それでも
僕はまた出発する
生きている限り歩く
得るか失うかではなく
それが
人間としての
宿命だから
夢だから

今日もまた
出発点に立っている

大野悠詩集 『小鳥の夢』 栞解説文
鈴木比佐雄

コールサツク社
2012